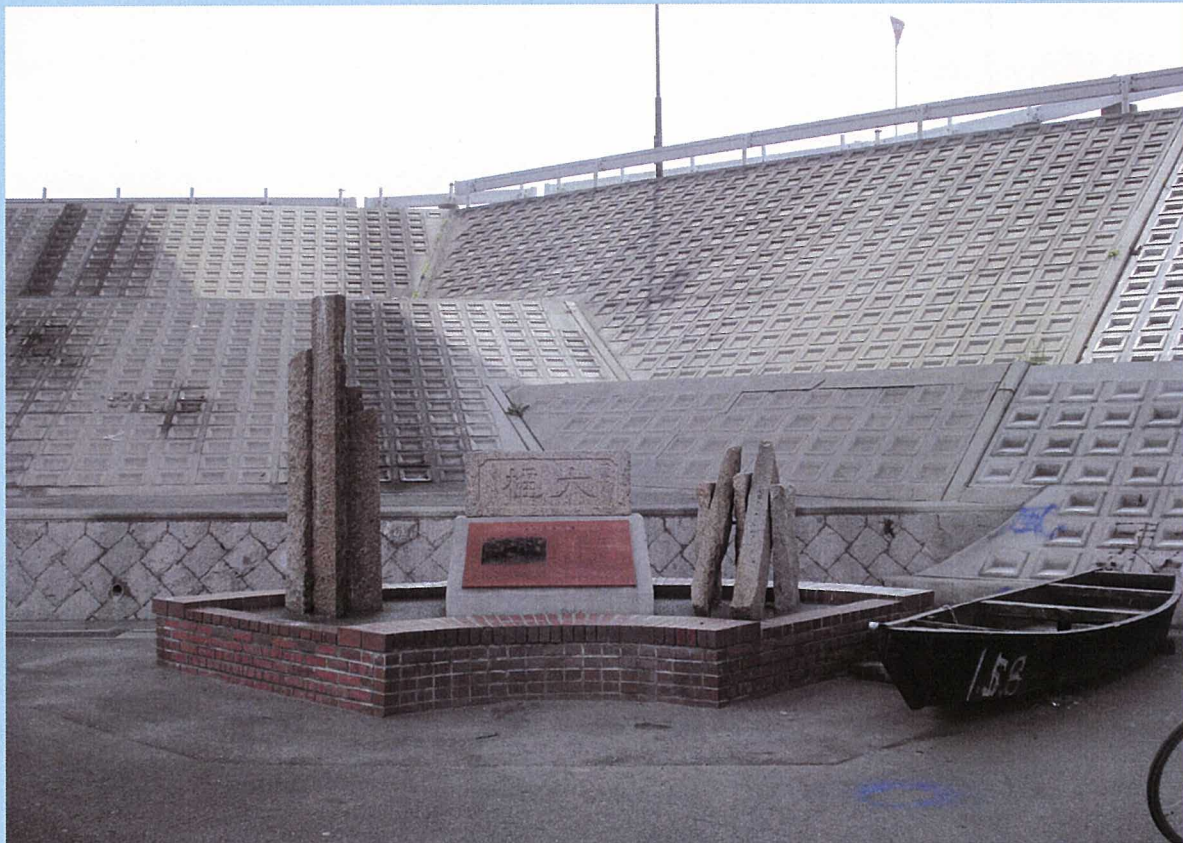


CENTER NEWS 2009. NO.279 **11**



協同組合 関西地盤環境研究センター

表紙説明

● 番田（芝生）大樋と番田井路

高槻市の南部に番田（芝生）大樋と呼ばれる遺跡があります。これは 1650 年頃に芥川の川底を横断した木製の樋の遺構を偲ぶものです。芥川の左岸側では番田（ばんだ）大樋、右岸側では芝生（しば）大樋と呼んでいたようです。

写真上段は芝生大樋を称えた遺跡のモニュメントの全景です。この下に大樋が造られていました。対岸には番田大樋のモニュメントもあります。下段は現在の大樋（コンクリート）を経て、遠くの神崎川まで水を流している番田井路（いじ）の遠景です。詳しくは本文をご覧ください。

（本田記）

目次

一言ご挨拶(理事就任)	田中 政憲	1
9月定例理事会		3
9月主な会議・会合・行事		4
組合員技術者紹介コーナー(第66回)	富島 悟	5
厄明けと新天地・・・	鈴木 剛	7
平成21年度技術者交流会開催報告	中山 義久	9
平成21年度技術者交流会開催報告と今、思うこと	鏡原 聖史	10
第1回「It asks the professional!!」前半		12
リフレッシュフォーラム【技術者のロマン(浪漫)】のご案内		16
【アフター5 ワイガヤ広場】開催報告(N01)	本田 周二	18
第3回ケータイフォトコンテスト募集		19
表紙説明	本田 周二	20
編集後記		21

一言ご挨拶（理事就任）



復建調査設計株式会社

常務執行役員大阪支社長 田中政憲

この5月、当センターの理事に就任してから早いもので、5ヶ月が過ぎようとしております。遅くなりましたがご挨拶申し上げます。よろしく願いいたします。

その間政権が交代し、景気対策である補正予算の削減が議論され、社会資本整備のあり方について大きな変化を求められている今日この頃です。

この業界に入り3年目ですが、それまで公共事業の発注者側におりました。組合員ならびにセンター職員の皆様に誠に申し訳ないのですが、当センターの存在を知りませんでした。土質・岩盤試験、水質・土壌分析等に創立以来30年にわたり職員一同、高品質・サービス向上に努められてきたことに対しまして感謝いたします。建設業界の最先端を担当し、目に見えない縁の下の力持ちとして非常に重要な役割を果たしてこられたわけで、今後は、センターの一員として多いに存在感をアピールし、土質試験等の重要性等とセンターの利用促進につながるような活動を出来ればと考えております。

さて、近年、税金の無駄使いが大きな話題になり、公共事業の必要性等見直しが盛んに議論され、公共事業費が縮減され続け、我々の業界にとりまして大変厳しい環境となっておりますが、本当に無駄な公共事業を実施しているのでしょうか。

ダム問題にしても大規模事業になればなるほど地元調整等期間・時間がかかり、時代とともに社会ニーズも変わってくると考えますが、また高速道路の4車線化中止問題等につきましても最近の祝・休日の高速道路の大渋滞を聞きますと、まだまだ高速道路の利用需要が多く必要なように思えるのです。公共事業の必要性について利用者・地元関係者を含め議論を充分すべき良い機会であり議論されているのか疑問に思うこの頃です。また整備した施設を充分機能させるためには、日常の維持管理が欠かせません。と申し上げるのは、最近、「ローマ人物語・すべての道はローマに通ず」（著者：塩野七生）を読みまして、ローマ人は、社会資本整備は「人間が人間らしい生活をおくるために必要な大事業」と考えてローマ帝国内に街路・水道等を張り巡らせ、維持管理したと書かれております。今から2000年以上前の話ですが、人間が安全に安心して生活するために必要な事業として位置づけ社会資本整備

を続けた点に頭が下がる思いです。

大きく変貌しようとしている社会ですが、今後、環境等が重要視される中、新たな社会ニーズを把握して社会資本整備とは何か、我々も真剣に議論し国民の期待に応えることが重要と考えております。

一年を通じて気候の良い時期は短く、暑さ・寒さが長く感じるのが四季ですが、我々を取り巻く環境も同じで楽しいことは短く、辛い苦しいことは長く感じると私は思います。楽しいことが少しでも長く感じられるように努力していかなければならないと考えますが、何はにおいても健康が第一です。新型インフルエンザがはやっているようですが、組合員の皆様、センターの職員の皆様、健康に気をつけていただき、組合とセンターの運営、発展にご尽力、ご協力方よろしくお願いいたします。

勝手なことばかり書きましたが、微力ながらセンター運営と発展に貢献できるようがんばりますのでよろしくお願い申し上げます。

組合員技術者紹介コーナー（第66回）



所 属：株式会社メーサイ
氏 名：富島 悟（とみしま さとる）
生年月日：昭和47年12月31日
出 身 地：大阪府

明治コンサルタントの岩村さんから紹介をいただきました(株)メーサイの富島と申します。岩村さんには、ある現場でお世話になり、若い頑張りのある方だと思いました。そう思う反面、私ももう、若い世代とは言えない歳になってきたのだと思います。

では、簡単に自己紹介を。

平成7年、工学部土木工学科を卒業しました。150人ほどの同期の卒業生は、ゼネコン、工務店、設計コンサルに就職する者がほとんどで、地質調査会社に職を求めたのは私一人だけでした。会社の先輩には、土木や地学系の学科以外の方もいて、大学で学んだことが活かされるのか？とも思いましたが、実務をこなしていくうちに、土木の基礎的な知識が役立つ時が何度もおとずれ、ピンチを救ってくれたこともしばしば。そんな会社に数年勤めましたが、残念ながら倒産してしまい、計2度の転職を経て現在に至っています。

趣味は、少しかじったものを含めると、山登り、写真、陶芸、その他です。

高校生の時、ワンダーフォーゲル部に入部してから山登りを始めました。初の北アルプス縦走合宿では、連日の雨に悩まされ、1年生ですからテントの隅に寝かされ、濡れた寝袋と寒さで眠れず、「合宿から帰ったら辞めてやる」と思いながら、歩かなければ帰れない雨の道をひたすら歩きました。でも、合宿最終日、空を覆っていた雲が途切れ、雄大な山々と足もとに広がる波打つ雲海を見たとき、涙が出るほど感動し、大自然が私の心を奪ったのでした。以後、毎年1泊～4泊ほどの山登りに出かけていましたが、ここ3年ほどは疎遠になっています。ちなみに、日本百名山のうち、足跡を残したのは18座です。



写真が好きになったきっかけは、やはり山登りです。きれいな風景を写真に残したいという思いから、重い一眼レフ(当時はまだフィルム)と三脚を背負って山へ向かいました。もちろん、肉眼で見る風景が一番感動的ですが、写真で見る風景も素晴らしいものです。今では、デジタル一眼と、コンパクトデジカメを使い分け、主に家族の写真をびっくりするほどたくさん撮っています。

陶芸は、陶芸教室に通っていました。作品を自由に作らせてもらえる教室だったので夢中になってしまい、月に3~4回、足を運んでは茶碗、丼鉢、皿、湯呑などたくさん作り、今から思えば迷惑だったかもしれませんが、結婚のお祝いとして友人にプレゼントしたこともあります。今はボーリング調査試料の粘土しか触っていませんが、陶芸はぜひ再開したい趣味です。

その他の趣味ですが、これはなんと言っても2歳の息子です。他の趣味を押しつけています。今は、日々成長する姿を見るのが最大の楽しみです。最近は言葉の種類が急激に増えて、会話が成り立つようになってきたので、いろんな驚きがあります。写真も、必然的にほとんど彼がモデルです。粘土遊び(?)は、もう少ししたらできそうです。大きくなって、家族そろって山登りに行くのを夢見ています。

最後になりますが、私たちの仕事は社会資本の整備や防災には欠かすことができない重要なものだと信じています。最近は不況や政権交代など、社会の動きが不安定で、この先どうなるのか不安な要素も多いですが、明るい社会になるよう、微力ながら頑張っていきたいと思います。

さて、次回の組合員技術者紹介は、株式会社ヨコタテックの川上正敬様です。突然のお願いに快諾していただきました。よろしく申し上げます。

厄明けと新天地・・・

協同組合 関西地盤環境研究センター
地盤技術課 鈴木 剛

平成21年6月より当センターに勤務している鈴木です。4月までは建設系の調査・設計コンサルタントに19年間勤務していました。

前職では、地盤に関する調査、設計、及び造成管理業務に従事するとともに、国交省近畿地整管内事務所、関西電力総合技術研究所、東京大学生産技術研究所に出向するなど、貴重な経験を積ませて頂きました。その経験と知識を当センターで活用できれば幸いです。

さて話は変わって、みなさん『厄年』ってどう思われていますか、またどのような事が身の回りに起こったのでしょうか。

あらためて、『厄年』とは“陰陽道で教宣される災難が多く降りかかる年齢”のことです。

男性の場合は数え年で25歳・42歳・61歳、女性の場合は19歳・33歳・37歳が本厄とされています。特に男性の42歳、女性の33歳は『大厄』と呼ばれ、凶事や災難に遭う率が非常に高く、十分な警戒が必要と言われています。また、いずれの本厄にもその前後1年間に前厄と後厄の期間があり、本厄と同様に注意すべきとされています。



写真-1 筆者が厄除けに参拝した神戸市にある『多井畑厄除八幡宮』
(多井畑厄除八幡宮HP、<http://www.tainohatayakuyokehachimangu.or.jp/>より引用)

私はこのような迷信や宗教事には全く無関心でしたが、まさしく『大厄』の時に、自分だけでなく近親者にも厄災が飛び火した格好となりました。

『前厄』：実母の癌が判明し手術

『本厄』：実母の癌が再発し再入院

『後厄』：実母の死去、私の勤務先が民事再生法を適用



全景（近代的な室内墓地タイプ）



墓地（納骨堂）のひとつ：十三仏

写真-2 亡母の遺骨を納めた西宮市にある『真言宗 西宮聖天 聖天寺』
(聖天寺ホームページ、<http://shohtenji.com/index.html/>より引用)

大厄がやっと明けた本年は、“再出発”の年。年明け早々から家を引っ越し、また当センターに再就職を決めて、気持ちを一新しました。これからの第2の人生に向けて、着実なる一步を踏み出したところ です。

このような私ですが、今後ともご指導・ご鞭撻の程、宜しく願います。



自宅マンションより宝塚方面の眺望



『COCOE 尼崎』

写真-3 筆者の新居周辺の風景

平成 21 年度技術者交流会開催報告

協同組合 関西地盤環境研究センター
所長 中山 義久

去る平成 21 年 10 月 15 日(木)午後 3 時～5 時、当センター3 階会議室において表記交流会が開催されました。今年のテーマは「もし明日から地質調査業界がなくなったら？」でした。参加者は 20 代～40 代前半までの技術者 11 名でした。

ダイヤコンサルタント 鏡原氏の楽しい司会で和やかな雰囲気のもと、参加者の自己紹介から会はスタートしました。全員の方がほぼ地質調査とはなんぞやという、ごく当たり前の質問とその解説がありました。それによると地質調査には学術的分野、資源開発分野、建設事業分野の 3 つがあり、その業務量割合は 1 : 1 : 8 程度であること。そして、地質調査がなくなる、あるいは出来なくなると、現在の生活を維持出来なくなるのが大方の意見でした。つぎに議論があったのは、地質調査が世間一般での認知度が低いので、これを機に我々の業界のことを啓蒙しようとする意見、しなくて良いとの意見があり、参加者の業界に対する想いの違いが明らかになりました。

さらに、懇親の場で、参加者の発表内容の根本に所属企業のカラーが現れていたことが話題になり、皆さん自分の所属企業のカラーと比較し、感慨深げに聞き入っていたことが印象的であった。

最後にこの会では結論というものは出ませんでした。このテーマを通して地質調査業界の将来について再認識させられた一日でした。参加者の皆さん、どうもありがとうございました。



写真-1 司会のダイヤC 鏡原氏



写真-2 熱心に聞き入る参加者の面々



写真-3 第二部の始まり、乾杯

平成 21 年度技術者交流会開催報告と今、思うこと

株式会社ダイヤコンサルタント
鏡原聖史

昨年の蒸し暑かったあの日に開催された技術者交流会に参加して、はや一年が経ちます。あの会でご指名いただきました鏡原です。今年は、私が技術者交流会のテーマ提案から司会進行までさせていただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げさせていただくとともに開催報告を行いたいと思います。またこの文章を書きながらもう一度交流会を振り返ってみたいと思います。

さて、今年度の技術者交流会は、「もし明日から地質調査業界がなくなったら？～自覚と将来へ～」と題して、若手、中堅技術者にフィクションを語っていただき、その中から本業界の重要性、責任の重大さ等を改めて認識し、参加者の方々のモチベーションを高められる機会になればと企画しました。

参加者は、表-1 の技術者 11 人にご参加いただき、写真-1 に示しますように自己紹介からテーマに関するフィクションを順番に発表していただきました。短い発表時間の中でおもしろい自己紹介があり、テーマに対してそれぞれが真剣に考えられた意見を発表していただいたと思います。交流会の最後には、発表された方の中で最もすばらしい発表者を決めるため、参加者全員による投票を行い、協同組合関西地盤環境研究センター鈴木剛様が最優秀発表者に輝きました。私からのプレゼントとして次回の司会をお願いしたいと思いますので、どうぞ宜しくお願いいたします。以上のような流れで交流会が活発に行われたことを報告いたします。

次に、当日の交流会ではうまくまとめることができませんでしたが、ここで少し整理しまとめたいと思います。

参加された皆さんの意見は、今後も地質調査業(社会基盤を維持するための調査)がなくなることはない、社会に絶対に必要なものであるということ、一般的にイメージが地味で「縁の下の力持ち」的な存在であることについては一致していたように思います。

今、振り返って考えると、もし本当に調査がなくなると現在の社会基盤は崩壊し、原始の世界へ逆戻りすることを意味しており、現在の生活を持続発展するという条件のもとで我々の仕事は重要な意味を持つこととなります。したがって、私たちは持続発展させる影の仕事を担っており、さらに影として社会に貢献しなければなりません。また、このような社会貢献をしている業界、企業、個人を国民の方々に知っていただき、最終的には国民の生活に還元されている

ことを理解してもらう努力も必要であると思います。以上を自覚から将来という技術者交流会の副題のまとめとさせていただきます。

最後に、大変お忙しいところ私に付き合っていたいただいた方々、参加者を快く送り出していただいた会社にご場をお借りしてお礼申し上げます。また、この文章を読んで参加した方のご感想を聞きたいと思いますので、ぜひ CENTER NEWS までご投稿をお願いいたします。

表-1 平成 21 年度技術者交流会参加者一覧

届出順	氏名	所属
1	鏡原 聖史	株式会社ダイヤコンサルタント
2	中村 出	株式会社日建設計シビル
3	遠藤 彰博	中央開発株式会社
4	山口 匡宏	中央復建コンサルタント株式会社
5	鈴木 剛	協同組合関西地盤環境研究センター
6	今西 立昌	株式会社関西地質調査事務所
7	志賀 直樹	国際航業株式会社
8	秋山 晋二	国際航業株式会社
9	尾山 寿史	株式会社ダイヤコンサルタント
10	松本 修司	協同組合関西地盤環境研究センター
11	松浦 卓史	株式会社関西地質調査事務所



写真-1 交流会の写真

第1回

「It asks the professional!!」前半

新企画の「It asks the professional!!」をお届けいたします。

この企画は、「この世界にこの人あり」をコンセプトにゲストの研究内容や、それにまつわる貴重なお話を情報化小委員会委員らが実際にインタビューを行ない、組合員の皆様にご紹介するというコーナーです。今月号は前半部分をお届け致します。

第1回目の professional は、関西大学 西形 達明 准教授です。

【プロフィール】

名前：にしがた たつあき 西形 達明

所属：関西大学
環境都市工学部都市システム工学科

専門分野：補強土、斜面安定、切土、盛土、
土の動的性質、まさ土、不飽和土、
浸透破壊、廃棄物処理場、ジオテ
キスタイル、ジオメンブレン、
地盤改良



趣味：サイクリング etc

遺跡修復プロジェクトの概要

エジプトのサッカラ地域において地下埋葬室にある古代壁画の保存修復作業が、2003年よりエジプトと日本の合同で実施されています。

長年の間の雨水侵入や埋葬室の母岩の劣化によって、壁画には隔離崩落している部分が多く見られ、その状態は危機的な状況にあるのが実情です。

修復にあたり、風化により地下埋葬室自体の劣化が著しいため、壁画の修復作業中の安全と将来の地下埋葬室の歴史遺産としての保存活用を考えて、岩盤調査も同時に進められています。

遺跡修復プロジェクト！？

委員「エジプトでの貴重な体験を伺いたいのですが、どういうきっかけでエジプトの遺跡修復に携われるようになったのですか？」

先生「関西大学は考古学で結構有名で、文学部の先生がエジプトのサッカー遺跡の石室壁画の修復作業に携わっていたんです。作業はエジプト・日本・ポーランドが共同して行っており、私は劣化した石室内での作業の安全確保するために石室の劣化調査を行うことを目的にプロジェクトに参加したんです。」



写真-1 サッカラ遺跡

委員「関西大学は考古学で有名なのですね。今回のプロジェクトの期間はどのくらいなのですか？」

先生「5年計画です。今、2年目なので、あと3年あります。」

委員「非常に長い年月がたった地下埋葬室の損傷状況に興味がありますが、実際はどんな様子、どんな対策をお考えでしょうか？」

先生「地下埋葬室の天井は、触れただけで、隔離してすぐに落ちてしまいます。その為小さなロックボルトを打ち付けてからエポキシの吹付けによる安定化作業をしようかと考えているのですが、打ち付ける際に振動が発生するので、それでクラックが大きくなるのではないかと考えたりしております。」

委員「クラックはどんな風に入っているのですか？」

先生「対策を考えるために、どういう風にクラックが入っているのかを知りたくて、レーダー探査機をエジプトへ持って行ったのですが、レーダー探査機では縦や斜めのクラックの深度をきっちり把握するまでには至りませんでした。また、このレーダー探査機を持って行く為に色々と書類を揃えたのですが、入国の際

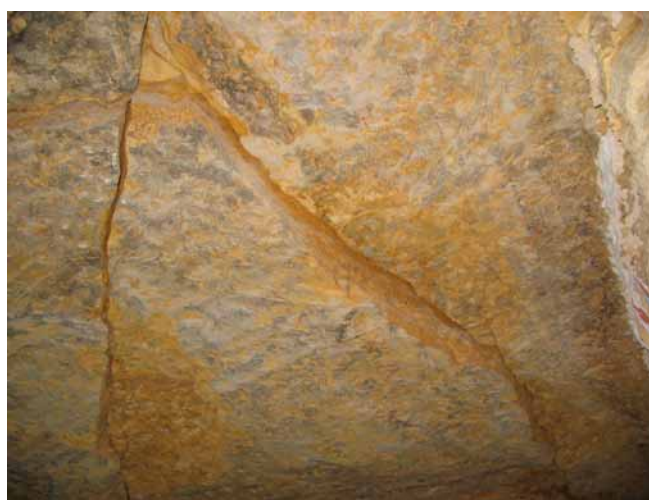


写真-2 クラックの様子

に没収されてしまい、いくら書類を提示してもダメだったので、カイロ大学の方と一緒に次の日に引き取りに行ったら、すんなり返ってきたんです(笑)。」

お 国 柄

委員「石室の壁画修復作業には日本とポーランドの研究者が携わっていると言うことでしたが、何か文化の違いのようなものはありますか？」

先生「ポーランドの研究者は美術系で、女性の方が多いです。プロジェクトリーダーも女性で、とにかく自分の意見をはっきりと言うんです。日本の技術者とよくぶつかっていましたが(笑)。劣化している石室の修復に関しても、日本の技術者は弱いものは弱い材料で補強して修復するのですが、ポーランド的には、弱いものは強い材料で固定しないとダメという考え方なんです。だから、京都の頑固オヤジ的な日本の技術者とはぶつかってしまっていましたね(笑)。結局、ポーランド側が壁画修復をすることになったのですが、壁画が全てが剥がせずに残っていましたね。

前半はポーランドの大学の人に来て修復作業をしていたのですが、丁寧にしすぎて工程が遅くなり、今年からはプロ（専門学校系 技術系）の方が来られて作業しています。スピードは速いのですが、作業自体が荒くなっていますね(笑)。」



写真-3 修復作業①

委員「修復作業の管理などにエジプトは関与していないのですか？」

先生「報告さえしていれば基本的には関与してきません。修復に関しても、わりあい寛容です。オリジナルとレプリカが区別できれば良いので、修復しましたという跡が分るようにすれば良いんです(笑)。」

要するにお金を出してくれて無事に作業が終了するのであれば何も文句は言わないというスタンスです。日本のように昔のままに保存するために難しいことは言いません。これはいたるところにまだ手をつけていない、発見されていない遺跡が散在するため希少価値の違いかもしれません。」



写真-4 修復作業②



写真-5 修復作業③

次回も、西形准教授のインタビュー（後半）記事をお届け致します。
お楽しみに！！

『技術者のロマン(浪漫)』のご案内

～～ 産・官・学の立場を超えて、視点を変えて、
世界を拡げて、未来をつくらう ～～

主催：協同組合 関西地盤環境研究センター

共催：関西地質調査業協会

協賛：地盤工学会関西支部・土木学会関西支部

我が国は、未曾有の不況に直面しており大きな転換期を迎えています。土木業界も例外ではなく、強烈な逆風を浴びながら、多くの会社が生き残りを賭けて、悪戦苦闘を続けている状況がうかがわれます。

その中で、土木に大いなるロマンを抱き飛び込んできた技術者たちが、もがき苦しみ、ロマン(夢)や誇りを失いつつある現状があります。しかし、地球を相手に、人類のため・人間のために築き上げてきた土木の役割が終わったわけではありません。人類が地球の一員として自然との共生の中で快適に生きるためや、世界文化遺産に代表される技術・知識・知恵の伝承などのロマンを駆り立てる役割はいまも変わっていません。

そこで今回は、沈滞ムードの中で見失われつつある『技術者のロマン(浪漫)』をテーマに、別紙のとおりリフレッシュフォーラムを企画しました。組合・会員企業に限らず、広く産・官・学各機関の土木に関連する技術者・研究者の方々が一堂に会して、明日への活力そして未来につながる議論を展開したいと考えています。関係者と思われる方全員を対象に参加を募ります。奮って申込みいただきたくお願い申し上げます。

ロマン：感情的、理想的に物事をとらえること。夢や冒険などへの強いあこがれをもつこと。

(辞書：大辞泉より)

企画概要

(詳細要領は別紙参照)

1. 日時 平成 21 年 12 月 1 日 (火)

第1部	フォーラム	13:30 ~ 17:00	(CPD:4)
第2部	交流会	17:30 ~ 19:30	
2. 場所 ラマダホテル大阪 (地下鉄御堂筋線 中津駅直結)
3. 主催 協同組合 関西地盤環境研究センター 共催：関西地質調査業協会
協賛：地盤工学会関西支部・土木学会関西支部 (申請中)
4. 講演者 基調講演：塚田幸広氏 (国土交通省 近畿地方整備局 企画部長)
特別講演：櫻井春輔氏 (財団法人建設工学会 理事長、神戸大・広島工大名誉教授)
5. 参加費 第1部： 無料 第2部：3,000円 (予定) 当日徴収
6. 申込方法 別紙の申込書をメールまたは FAX で送付してください。
問合せ先：協同組合関西地盤環境研究センター 担当 楠本
〒566-0042 摂津市東別府 1-3-3 電話 06-6827-8833
E-mail : service@ks-dositu.or.jp FAX 06-6829-2257
7. 締切 平成 21 年 11 月 13 日 (金) 定員：120 名
定員に達し次第締め切らせていただきます。

技術者のロマン(浪漫)

～～ 産・官・学の立場を超えて、視点を変えて、
世界を拡げて、未来をつくろう ～～

主催：協同組合 関西地盤環境研究センター

共催：関西地質調査業協会

協賛：地盤工学会 関西支部

土木学会 関西支部

日時	平成 21 年 12 月 1 日 (火)		
	第 1 部	フォーラム	13 : 30 ～ 17 : 00 (CPD : 4)
	第 2 部	交流会	17 : 30 ～ 19 : 30
場所	ラマダホテル大阪 (地下鉄御堂筋線 中津駅直結)		
参加費	第 1 部： 無料	第 2 部： 3,000 円	

第1部 **技術者のロマン(浪漫)を語るフォーラム**

【基調講演】 近畿地方整備局 企画部長 塚田幸広氏 『行動する技術者たち』

【パネルディスカッション】

コーディネーター

関西地盤環境研究センター専務理事 佐藤和志氏 (元技術者・民間人校長)

特別講演 神戸大学名誉教授・広島工業大学名誉教授

(財)建設工学研究所 理事長 櫻井春輔氏 『土木のロマン』

話題提供① 地盤研究者が経験したエジプトの遺跡調査、異文化交流

センターニュース新企画の登壇者 西形達明氏 (関西大学准教授)

② 技術者交流会「もし明日から地質調査業界がなくなったら？」に見るロマン

技術者交流会コーディネーター 鏡原聖史氏 (ダイヤコンサルタント)

③ 私のプロジェクト X (コンサルタント技術者のロマン)

関西地盤環境研究センター副理事長 本田周二氏 (日建設計シビル)

パネラー

- ・ 櫻井春輔氏 (前掲)
- ・ 西形達明氏 (前掲)
- ・ 鏡原聖史氏 (前掲)
- ・ 本田周二氏 (前掲)
- ・ 高村勝年氏 (関西地盤環境研究センター理事長)
- ・ 柳浦良行氏 (関西地質調査業協会理事長)

《意見交換》 《総合討論》

第2部 **技術者のロマン(浪漫)を語る交流会**

【交流会】 司会 関西地質調査業協会

* パネラーや参加者との交流を通じてロマンの深耕を図りましょう



【アフター5 ワイガヤ広場】開催報告 (No1)

センターニュース 10月号でお知らせしたワイガヤ広場を10月20日17時より開催しました。どれだけの参加者になるか心配しましたが、最終的に30名近い方々が集い、盛況でした。

技術畑の方ばかりでなく、営業の方もご参加頂けたのは幸いでした。色々な目線で語り合うことが出来ました。下駄を鳴らしてはいませんでした。一升瓶と枝豆(丹波黒豆)をぶらさげて駆けつけてくれた我がよき友SCのIさん、ありがとうございます。

肝心の『飽和砂のUU試験で ϕ が出るか』という話題については、教科書的な説明の『 $\phi=0$ 』ではないという意見がでました。とにかく試験で確かめようということになりました。次回はその結果をみて議論したいと思います。

広場の開催状況を写真に取りましたのでご覧ください。多くの参加者であったため、最後は立食パーティーとなりました。これも広場の主旨のひとつです。

やはりセンターに来て、種々の立場の方々と話をすると元気が出ます。愉快です。皆さんも時間が許せばお立ち寄り下さい。次回の開催日時を下に記載します。



写真-1 熱い議論



写真-2 今からワイガヤ広場で元気になるぞ!!



次回： 開催場所：関西地盤環境研究センター

開催日時：平成21年11月20日 17時～(第2回)

連絡先：Tel:06-6827-8833 E-mail: jyoho@ks-dositu.or.jp

参加費：¥500/人(ビール代 つまみはセンター供出)

(文責 広場管理人本田)

第3回ケータイフォトコンテスト テーマ“秋”

仕事場や旅先での一コマ、プライベートでの出来事、メッセージを伝えるワンショットなど、ケータイフォトに粋な題名を添えて応募してみませんか？

センターニュースでは、組合員の皆さんが携帯電話で撮影した写真を募集し、フォトコンテストを開催しております。

機材の性能や技術の差が出にくいケータイフォト限定なので、素人の方でも入選が狙えます。なお、入選者には豪華賞品？を用意していますので、奮ってご応募ください。

[応募方法]

携帯電話で撮影した写真データに下記の事項を必ず書き添えて、メール「E-mail : [jyoho@ks-dositu.or.jp](mailto: jyoho@ks-dositu.or.jp)」にてご送信ください（お一人様の作品は1点にてお願いします）。

- ① 題 名
- ② 撮影した組合員の会社名と所属
- ③ 撮影者氏名（ペンネームにて掲載）
- ④ 連 絡 先



こちらの QR コードからも
申込できます

[〆切]

平成 21 年 12 月 14 日（月曜日）午後 5 時迄 です。

[注意事項]

ご応募頂いた写真は HP でも公開することがありますので予めご了承ください。また、人物・美術品・写真等、著作物もしくは肖像を作品に使用する場合は、予め著作者や被写体の方などから事前の使用許諾・認証を得た上でご応募ください。

編 集 後 記

秋も深まり、今年も余すところ2ヶ月となりました。

今年は私にとって大厄の歳廻りにあたりますので、人生でも重要な一年になると思ひまして、新年早々に近隣の厄除けで有名な神社に祈願に行きました。その御利益のお陰でもありましょいか、現在まで大きな病気や怪我をすることもなく過ごしております。年末まで“このまま無事に過ごせたらいいなあ”と思っております。

これから年末にかけて、流行している新型インフルエンザに加え、従来型のインフルエンザの流行も心配な時期に入ります。年末から年度末に向けて、仕事が忙しくなりますが、皆さんも体調管理には十分ご留意下さい。

(山岡 記)

(表紙説明)

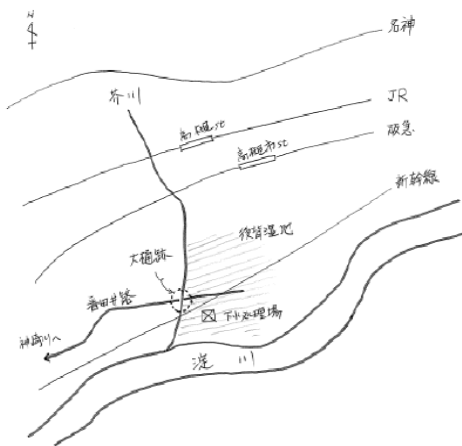
「番田大樋」

株式会社 日建設計シビル

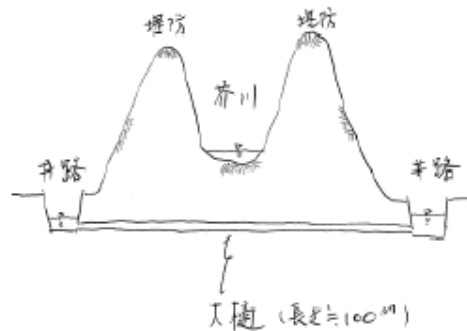
本田 周二

高槻市街地を南流する芥川が淀川に注ぎ込む辺りは低平地となります。下の図に示すように、特に左岸側は排水不良の低湿な後背湿地が広がっています。現在、下水処理場のあるこのあたりは、大樋町と称されています。

この低湿な左岸地域の水利ならびに洪水対策として排水路（井路）を設け、さらに川底を横断する木管（大樋）により、右岸側の井路に結びつける大工事が今から 450 年も前に行われたことは驚きに尽きませんか？



遺跡の所在場所



大樋のイメージ

工事は慶安 3 年（1650 年）の大洪水を契機に、高槻藩主永井直清により執り行われたものであり、大土木工事であったと推察されます。初期の工事は承応 2 年（1653 年）に完成し、芥川右岸先の柱本というところで淀川に流されるようになりました。しかし、淀川の河床が上昇したことで、最終的には河村瑞賢により元禄 13 年（1700 年）に現在の神崎川に放流する流路が完成しました。

当時の樋管は、長さが 47 間（103m）、内径 5 尺 2 寸（1.6m）四方の木製と記されています。大樋のイメージは上図のようです。ポイントは、芥川が天井川であったことです。この話は昨年に高槻市の方に伺ったのですが、にわかには信じがたく、この近くに住む私としては確かめないわけには参りませんでした。

現在は、コンクリート製になってしまいましたが、相当な水量が滔滔と右岸側の井路に流れ出ています。

(右写真参照)。

注：本文はネットで見かけた『VG 槻輪だより』を参考にしました。

